

メルヴィルのゴシック性 — 『白鯨』と「ベニト・セレノ」における船を中心に—

関根 全宏

国際コミュニケーション学科

序

アメリカのゴシック小説の系譜は、1798年に出版されたチャールズ・ブロックデン・ブラウン (Charles Brockden Brown) の長編第1作『ウィーランド』(*Wieland; or the Transformation*, 1798) から始まる。これはゴシック小説の批評史においてはほぼ常識であろう¹。『ウィーランド』について、たとえばデイヴィッド・パンター (David Punter) は、この小説における恐怖の主な源は「理性の廃位 ("dethronement of reason")」(193) にあると述べ、ブラウンが「遠く離れた城や異国の地ではなく、その時代の眼前にありそれと分かるアメリカの世界において不合理な恐怖心と幻想の陰謀 ("the machinations of superstition and delusion, not in distant castles or remote countries but in a contemporary and recognisable American world")」を描いた点にこそ、彼の特筆すべき価値があると論じる (193)。ここでいう「アメリカの世界」とは、言うまでもなく、ブラウンの生地であり『ウィーランド』の舞台となっているフィラデルフィアのことである²。

職業小説家としてだけでなく、ゴシック小説家の父としてのブラウンに対するこの評価にはアメリカン・ゴシックの特徴を考える上で重要な点が二点ある。一点目は、アメリカン・ゴシックが「理性の廃位」、「不合理な恐怖心」といった反合理主義的な基盤をもつという点である。パンターが述べている "superstition" とは、超自然的なものや、自然・神などに対する迷信から生じる不合理な恐怖心のことを意味し、「理性 ("reason")」のみが真理に達しようという認識論とは相容れない概念である。

二点目は、アメリカのゴシック小説の舞台は「その時代の眼前にありそれと分かるアメリカの世界」

である点である。一見するとこの自明な前提を改めて確認する必要があると思われるのは、ブラウンから始まるアメリカン・ゴシックの系譜に、ハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の名がいかにかに連なるかを改めて考えてみる際の糸口として、決して無意味ではないと思われるからである。海を舞台にしたメルヴィル作品は、いかなる点において「遠く離れた城や異国の地ではなく、その時代の眼前にありそれと分かるアメリカの世界」を構築しているのか。本論はこの観点から、主にメルヴィルの長編小説『白鯨』(*Moby-Dick*, 1851) 及び短編小説「ベニト・セレノ」("Benito Cereno", 1855) における船の描写を分析することで、船上で展開されるメルヴィルのゴシック性とは具体的にどのようなものかを考察する。

1. アメリカン・ゴシック

ブラウンは、後続の作家にどのような影響を及ぼしたのか。また、メルヴィルはブラウンからどのような影響を受けたのか。この点については、批評家たちは意見を異にしてきた。というよりも、多くの作家たちが様々な形でブラウンの影響を受けてきたと言った方が正しいだろう³。たとえば、アメリカ文学研究の必読書の一つともいえる『アメリカ小説とその伝統』(*The American Novel and Its Tradition*, 1957) において、リチャード・チェイス (Richard Chase) は、メルヴィル、ヘンリー・ジェイムス (Henry James)、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) などの作家の名前を挙げている (Chase 37)。ドナルド・A・リンジ (Donald A. Ringe) は、とりわけ、心理的サスペンスの様相を呈するメルヴィルの短編「ベニト・セレノ」にブラウンの影響をみる (Ringe 43)。

アメリカン・ルネッサンス期の作家を体系的に論じる F・O・マシーセン (F. O. Matthiessen) やデイヴィッド・S・レイノルズ (David S. Reynolds) は、メルヴィルよりも、エドガー・アラン・ポウ (Edgar Allan Poe) やナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) にブラウンの影響がより色濃く反映していると見做す (Matthiessen 201-202; Reynolds 43-47)⁴。パンターは、ブラウン、ホーソン、ポウを結びつける重要な鍵は「罪の病理 ("the pathology of guilt")」(189) であると指摘する。では、メルヴィルはいかなる位置にいるのか。

近年においては、2007年に出版された "The Locale of Melville Gothicism" と題された論文で、コーリー・トンプソン (Corey Evan Thompson) が、ゴシック性が立ち現れる場所について論じている⁵。トンプソンは、メルヴィルのゴシシズムは陸ではなく海に立ち現れる点を重要視し、この点にメルヴィル作品と他のアメリカのゴシック小説との決定的な違いがあると指摘する (Thompson 192-93)。後述するように、トンプソンは、メルヴィルのゴシック性が陸ではなく海を舞台にした作品により強く現れる理由について、作品の創作環境および作者の政治的思想及、とりわけ奴隷制を巡る問題意識が深く関わっていると論じている。この視点は、後に本論において、黒人をめぐる心理劇について論じる際に役に立つが、ここでは、メルヴィルが描く船がゴシック的想像力を展開する一つの装置であることを考察するためにも、アメリカン・ゴシックの定義についてもう少し詳しく検証してみたい。

パンターに拠ると、アメリカン・ゴシックとは、とりわけ「主要登場人物の心理的オブセッションの圧力によって歪められる状況 ("settings which are distorted by the pressure of the principal characters' psychological obsessions")」を扱い、「暴力 ("violence")」や「オブセッションの恐怖 ("horror of obsession")」、それに「一般的な狂気 ("prevalent insanity")」などを主要な要素として挙げるができる (3)。具体的に言えば、ホーソン作品の重要な主題のひとつであるピューリタニズムの原罪を思い起こしてもよいだろう。また、「理性 ("reason")」を超えた超自然的な、あるいは科学的には説明のつ

かない不合理な神秘的な現象とともにポウが描く心理劇を思い起こしてもよいだろう⁶。つまり、イギリスのゴシック小説が、「新古典主義の抑圧と拘束に対するロマン主義の反抗の産物」(八木 75) であり、人間の〈外〉の領域を追及するのであれば、イギリスのゴシック小説にはみられない個人の原罪意識や内的心理を表現し、〈内〉を追求するのがアメリカン・ゴシシズムを支える要素の一つであると要約することができる。

もう一つ、アメリカン・ゴシックを支える重要な要素が、人種的他者の存在である。既に先行研究に指摘があるように、英米のゴシック小説の決定的な違いは、先住民の不在／存在である (八木 77-87)。先住民に対するアメリカ白人の潜在的な罪意識と内的恐怖、あるいは先住民迫害というアメリカが抱える歴史的な問題が、人間の〈外〉の領域ではなく、〈内〉の領域を追及する際に重要な要素の一つとなる。この点については、『ウィーランド』の翌年に出版されたブラウンの長編小説『エドガー・ハントリー』(Edgar Huntly; or, Memoirs of a Sleep-Walker, 1799) の序文で作者自身が次のように解説している。

One merit the writer may at least claim; that of calling forth the passions and engaging the sympathy of the reader, by means hitherto unemployed by preceding authors. Puerile superstition and exploded manners; Gothic castles and chimeras, are the materials usually employed for this end. The incidents of Indian hostility, and the perils of the western wilderness, are far more suitable; and, for a native of America to overlook these, would admit of no apology. (3)

この引用で、ブラウンは、イギリスの中世の城や怪物、あるいは奇怪な幻想のようなではなく、先住民に対する罪意識やウィルダネスに対する脅威のようなもの ("The incidents of Indian hostility"/"the perils of the western wilderness") が、アメリカン・ゴシックに相応しいと述べている。

とはいえ、アメリカ的なゴシックの世界を構築する人種的他者は、必ずしも先住民だけに限られないだろう。トニ・モリスン (Toni Morrison) の言葉を借りれば、黒人が「アメリカ人らしさの感覚を生

むために極めて重要」(6)な存在として「アメリカのアイデンティティの精髓を入念に作り上げる舞台と決闘の場を提供している」(44)ならば、アメリカ的な(内)の領域を問題にする際に、黒人もゴシック的世界の構築に重要な形で関わる可能性は大いにありえるのではないか。さらに、場合によっては、先住民や黒人以外の異教徒も、ときにゴシック的恐怖の源として作品世界の構築に重要な形で関わるのではないか。そして、人種的他者とゴシック性との親和性が顕著にあらわれている作品として、メルヴィルの『白鯨』と「ベニト・セレノ」を挙げることができる。

2. 捕鯨船ピークォッド号と異教徒

メルヴィルが、先住民や異教徒をピークォッド号に乗船させる時、船自体が内的恐怖をあぶりだすメタファーとして描かれる点にメルヴィル独自のゴシック性が認められるように思われる。この点について、『白鯨』から具体的な例を二点挙げてゆく。

第一に、ピークォッド号は先住民的に造形されている。第16章「船("The Ship")」で記述されるように、この船は「古代メディアのように今はもう絶滅したマサチューセッツの高名な部族の名前("the name of a celebrated tribe of Massachusetts Indians, now extinct as the ancient Medes")」(Melville, *Moby-Dick* 69)に由来する。メイン・マストの後ろにある奇妙なテントのようなものは「ウィグワム("wigwam")」に見え、「ポトワタミー・インディアンの酋長の頭の天辺の髻("the top-knot on some old Pottowottamie Sachem's head")」を思わせる造りである(70)。

第二に、ピークォッド号は、異教徒的に描かれている。同じく第16章において、「もともとあったグロテスクな様子("original grotesqueness")」(69)を呈しているピークォッド号は、いわば「船のなかの喰人種、浮き彫りを施した敵の骨で満身を飾り立てている("A cannibal of a craft, tricking herself forth in the chased bones of her enemies")」(70)の様子が記述される。また、第96章「製油かまど("The Try-Works")」も、この文脈において重要な章である。この章は、ピークォッド号に乗船してい

る異教徒たちに多くの頁が割かれている章の一つである。この章において「あざ笑うがごとくに波頭の白い骨にしゃぶりつき("scornfully champed the white bone in her mouth")」、「蛮人をのせ、火炎を背負い、死体を焼き、そして闇のもなかに突進するピークォッド号("the rushing Pequod, freighted with savages, and laden with fire, and burning a corpse, and plunging into that blackness of darkness)」は、鋸打ちたちの野蛮なイメージと重ねられて描かれる。さらにそのイメージは、偏執狂的なエイハブ船長の内面と重なることで("the material counterpart of her monomaniac commander's soul")、彼の内面そのものがどこか異教徒的な他者性を孕んでいるということを暗示する形で彼の精神の奥深さを照らし出す装置となる(423)。

このように、ピークォッド号は様々な異教徒の乗組員で構成されているが、中でも3人の鋸打ち——喰人種のクィークェグ、アフリカ人のダグー、北米先住民のタシュテゴ——に加え、悪魔的な拜火教徒であるフェダラーという登場人物は、作中最も神秘的な人物として描かれている。リンジは『白鯨』におけるゴシック的想像力について論じる際に、鋸打ちたちとは異なるフェダラーの特徴について次のように指摘する。

Even Herman Melville, born in 1819 and drawing his inspiration from his early experience at sea, was only lightly touched by the Gothic, primarily in *Moby-Dick* (1851). Fedallah's burning eyes mark him as the devil figure of conventional Gothic fiction, and certain scenes in the romance, most notably that in Chapter XCVI, "The Try-Works," use typical Gothic devices. But aside from elements like these and his satire on Gothic fiction in Isabel's story in *Pierre* (1852), Melville makes relatively little use of the mode. It was never so central to his fiction as it was to the works of Poe and Hawthorne. (179 強調筆者)

この引用の下線部で、リンジは、フェダラーの人物造形、とりわけ「燃える眼("burning eyes")」が伝統的なゴシック・フィクションの手法であると指摘する。作中、フェダラーは「幽霊の悪魔("ghost-

devil, Fedallah"」(Melville, *Moby-Dick* 434) という側面が徹底して強調され、第73章では、三等航海士フラスクが、二等航海士スタッフとの会話の中でフェダラーを「黄色い幽霊野郎 ("gamboge ghost of a Fedallah")」、「悪魔の変装 ("the devil in disguise")」(325) と呼んでいる。リンジがゴシック性として注目するフェダラーの眼の描写は、第133章においても「死相めいた蒼白なほのめきがフェダラーのくぼんだ眼に燃え立つ ("A pale, death-glimmer lit up Fedallah's sunken eyes")」(548) というパッセージにおいても強調され、ポウの眼のゴシックの反復とも言えるかもしれないが⁷、ともあれ、第96章「製油かまど」で渾然一体となるゴシック的な異教徒性は、他のメルヴィル作品だけでなく、ポウやホーソンの作品にはあまりみられないという点が重要であろう。

さらに付け加えるならば、イシュメールとクィークエグが航海する船を選ぶ場面を思い起こすと、二人は、クィークエグの「黒い神 ("black little god")」(68) と呼ばれる木製の偶像の神秘的なお告げによってピークォッド号を選んでいる (第16章)。「理性 ("reason")」によってではなく、神秘的、超自然的、ないしは迷信的な力によって船が選ばれるという点も、このような船のゴシック性を予示する形で裏付ける一つの傍証となりはしないだろうか。

アメリカン・ゴシックの形成において、ホーソンがピューリタニズムや個人の原罪、「宗教的信条主義とその社会的効果 ("religious dogmatism and its social effects")」を主題とし、ポウが恐怖を感じる内的状況を綿密に分析したことに大きく貢献している功績があるならば、メルヴィルの特異性は、このように、食人種、黒人、先住民、さらには異教徒といった人種の他者が乗船するアメリカ的な船を舞台に、帝国主義や奴隷制といったイデオロギーを批判的な眼差しで描いた点にあると言えるだろう。この意味において、メルヴィルは、ゴシックと人種の他者を巡る問題について敏感に反応を示している作家である。

3. 奴隷船サン・ドミニク号と黒人をめぐる心理劇

異教徒に対するある種の恐怖によって生まれるゴシック性が『白鯨』におけるピークォッド号に認められる一方で、黒人をめぐる心理劇としてゴシック性が認められる作品が「ベニト・セレノ」である。『パットナムズ・マンズリー・マガジン』(*Putnam's Monthly Magazine*) に連載されたこの作品は、黒人の従僕を従えたスペイン人船長ドン・ベニトと黒人奴隷たちを乗せた奴隷船サン・ドミニク号が舞台である。

「ベニト・セレノ」におけるサン・ドミニク号も、ピークォッド号のように、死のイメージと眼のメタファーを伴いながら、ゴシック的に描写される。

… a proceeding not much facilitated by the vapors partly mantling the hull, through which the far matin light from her cabin streamed equivocally enough; much like the sun-by this time hemisphered on the rim of the horizon, and apparently, in company with the strange ship, entering the harbor-which, wimpled by the same low, creeping clouds, showed not unlike a Lima intrigue's one sinister eye peering across the Plaza from the Indian loop-hole of her dusk *saya-y-manta*. (Melville, "Benito Cereno" 47)

この引用部分は、霧に包まれたサン・ドミニク号が次第に姿を現す場面である。ここで、船体のキャビンの常夜灯の明かりが太陽と見紛うほどに朦朧と見える様子が、「リマの密通女の不気味な眼」に喩えられるのは、先述したフェダラーの「燃える眼 ("burning eyes")」と同様、いかにもゴシック的である。船体そのものが人間の頭部に重なり、デラノ船長を見つめ続ける。「霧が襤褸屑のようにあちこちを覆っている ("with the shreds of fog here and there raggedly furring her")」(48) サン・ドミニク号は、第1級の豪華船だと思われたが、霧のヴェールがはがされていくにつれて「白色粘土で漂白された独特の外観 ("the peculiar pipe-clayed aspect")」(48) を浮かび上げらせ、「喪章のような薄黒い階層の花綱 ("like mourning weeds, dark festoons of sea-grass")」が船名の文字の上についていることが明らかにされる。船体が揺れる様は、「霊柩車のように

揺れる ("hearse-like roll")」といったように、死のイメージが繰り返し強調され、「黒々とした半人半獣サチュロス ("a dark satyr in mask")」が仮面をつけて平伏しながら悶え苦しむ図柄などとも相俟って、サン・ドミニク号は船というよりも、イギリスのゴシック的な城の変容として立ち現れるようにも見えてくるかもしれない (49)。「黒頭巾を被った修道僧 ("throngs of dark cowls")」が船上に群がっているように見える描写も不気味だが、修道僧が「舷窓を通してじっとこちらを見ている ("Peering over the bulwarks")」という一節にも明らかなように、サン・ドミニク号の描写では眼や見られることのメタファーが徹底して使われている (48)。

このように、ホーソンの『緋文字』の舞台であるセーレムがゴシック的想像力を展開するのに相応しいアメリカの土壌であるなら、メルヴィルの船はそれに相当する。『白鯨』も「ベニト・セレノ」も作品の舞台は海ではあるが、捕鯨船ピークォッド号も奴隷制サン・ドミニク号も人種的他者のイメージとともに描かれるゴシック的な空間である。「ベニト・セレノ」におけるバボ (Babo) という名の黒人奴隷の首謀者に対する語り手の心理的恐怖と、眼のオブセッションは、ポウのゴシックに通じるものがある。黒人奴隷との遭遇を通して、アメリカ人の無意識下の罪意識や内的恐怖がサスペンス仕立てで浮かび上がってくるという点においては、「ベニト・セレノ」の方がポウ的と言えるかもしれない。ともあれ、作品が陸ではなく船 (より広く言えば海) であったとしても、メルヴィルが「ベニト・セレノ」で描く船は、ピークォッド号同様、人種的他者と白人アメリカ人との関係を背景に「遠く離れた城や異国の地ではなく、その時代の眼前にありそれと分かるアメリカの世界」(Punter 193) の縮図と言えよう。

4. 反奴隷制ゴシック小説としての「鐘塔」

「ベニト・セレノ」の対になる作品として同雑誌に発表されたメルヴィルの短編「鐘塔」("The Bell-Tower", 1855) を、ゴシック的作品として付け加えることができる。この作品の舞台となっているルネッサンス期のイタリアは、「イギリスのゴシック小説における最も伝統的な舞台設定の一つ ("one of the

British Gothic's most common conventions")」(Thompson 191) である。アメリカのゴシック小説家は、イタリアやフランスなどイギリスのゴシック小説が舞台とする場所に作品舞台を設定しないと考えられているため⁸、「鐘塔」は、ゴシック的ではあっても、アメリカ的とはみなされてこなかった。とはいえ、黒人をめぐる心理劇がアリカンのゴシック性の一つであるならば、この点において「ベニト・セレノ」の構造を反復する「鐘塔」はまぎれもなくアメリカン・ゴシック的な作品である⁹。鐘塔を建築する建築家の主人公が、自ら創作する鐘の自動装置に打たれて死ぬという物語に、メルヴィルは「ある私的草稿より ("From a Private MS.")」と記した上で次のようなエピソードを周到に掲げ、この物語が、奴隷主と奴隷の関係が転覆するアレゴリーであることをあらかじめ提示している。"Like negroes, these powers own man sullenly; mindful of their higher master; while serving, plot revenge" (Melville, "The Bell Tower" 174)。

奴隷主と奴隷の主従関係が逆転するという「ベニト・セレノ」の主題と「鐘塔」との主題とが共通している点については、奴隷制をめぐるメルヴィル作品を鋭利に論じるキャロライン・L・カーチャー (Carolyn L. Karcher) が、専制的な指揮下にある体制の欺瞞を暴く「対になる二部作 ("twin tales as a diptych")」(Karcher 157) として既に指摘している通りである¹⁰。とはいえ、「鐘塔」に暗示されている黒人表象、あるいは奴隷制について論じられることがあっても、それがゴシック性と結び付けられて、とりわけ、作品舞台がルネッサンス期のイタリアである点については必ずしも深く論じられてきたとはいえないように思われる。

黒人をめぐる心理劇として「鐘塔」を「ベニト・セレノ」の連作と見做した上で、この問いについて考える際に、トンプソンの議論が参考になる視点を提供してくれる。トンプソンは、「鐘塔」をゴシック作品として読みながらも、舞台がイタリアという理由で、アメリカ的ではないと見做す。しかし、むしろこの舞台設定が、「鐘塔」のアメリカ的なゴシック性を裏付けるように思える。

トンプソンは、メルヴィルのゴシック性と作品舞

台との関係を、作者の政治的思想との関連から次のように論じる。少し長くなるが、以下に議論を要約して示す。「メルヴィルは、ゴシズムが政治批判へと繋がる以上、アメリカを舞台にしてゴシック的テキストを描くことができなかつた。『ピエール』が例外であるのは、『ピエール』においては奴隷制について触れられていないからである。それは、メルヴィルの義父でありマサチューセッツ州最高裁判所で奴隷制の問題などを扱ったレミュエル・ショウ (Lemuel Shaw) との関係に因る。メルヴィルは、ショーから相当の金銭的援助を受けていたため、逃亡奴隷トマス・シムズ (Thomas Sims) を奴隷所有者に戻す判決を下したショーを非難することはできなかった。奴隷制を批判することは、ショーを批判することと同義だったため、ショーを父の友人、最高裁判所長官、さらには義父として尊敬していたメルヴィルは、ゴシック作品において奴隷制の問題に取り組む際、反奴隷制という自らの立場を隠すために舞台をアメリカに設定できなかった。したがって、『白鯨』や「ベニト・セレノ」といった陸ではなく海を舞台にした作品においてより顕著にアメリカン・ゴシック的な要素がみられるという」(Thompson 195-202)¹¹。

なるほど、メルヴィルの反奴隷制的なゴシック作品と、逃亡奴隷を奴隷所有者に戻す判決を下したショーに作家活動を経済的に支えられているという創作事情の観点から、作品の舞台設定の問題を考えるアプローチは示唆的である。しかし、ショーへの批判を避けるためにメルヴィルが作品舞台をアメリカに設定することを回避したならば、「鐘塔」の舞台をイタリアに敢えて設定したメルヴィルの身振りこそ、この作品が反奴隷制的なゴシック小説であることの証左であろう。

最後に、ポウについて触れて本論を閉じたい。黒人表象の視点から言っても、またポウの唯一の長編小説である船旅の冒険譚『ナンタケット島出身のアーサー・ゴードン・ピムの物語』(*The Narrative of Arthur Gordon Pym of Nantucket*, 1838) を書いたという意味においても、おそらく、ポウからメルヴィルの連続性が重要になってくると思われるからである。例えば、ポウには、本論で取り上げてきたメル

ヴィルのゴシック的作品に先だって、1843年に雑誌『サタデー・イヴィニング・ポスト』(*Saturday Evening Post*) に掲載された短篇「黒猫」("The Black Cat") がある。この作品は、「魔女の変装 ("witches in disguise")」(Poe 850) と語られる黒猫を中心に、人間の無意識化に潜む「天邪鬼の精神 ("the spirit of PERVERSENESS")」(Poe 852) をめぐる心理劇で、アメリカン・ゴシック小説としては有名な作品である¹²。語り手が絞殺したプルートという名前の「真っ黒な ("entirely black")」飼い猫と、「白い斑点 ("splotch of white")」がある以外はプルートと瓜二つの黒猫について、先行研究が指摘するように、黒人と白人の混血という人種問題を暗示していると読むことは可能である (Poe 854)¹³。「魔女の変装 ("witches in disguise")」としての猫は、先述した「悪魔の変装 ("the devil in disguise")」(325) としてのフェダラーを先取りしているが、メルヴィルの読書記録を見る限り、彼が『白鯨』や「ベニト・セレノ」、「鐘塔」を書いた時点でポウの作品を既に読んだという確かな証拠はない¹⁴。ともあれ、黒人をめぐる心理劇としてゴシック作品を書いた点において、ポウは、メルヴィルの先達として取り上げることができ、この意味において、ポウのゴシックはメルヴィルにたとえ部分的にであっても連なっているだろうが、この点の詳細の分析については稿を改めるとしたい。

結

本論では、メルヴィルにとって、船の上がアメリカ的であるという観点から、メルヴィルのゴシズムがいかに船の上で展開されるかを探ってきた。加えて、メルヴィルのゴシズムの立ち現れ方を相対的に眺めるために、陸を舞台にした作品であるが「ベニト・セレノ」と対になる作品「鐘塔」のゴシック的要素の背景を検証した。人種的他者が乗った船が恐怖と心理劇の作品世界の基盤を作るかたちでゴシック的に機能している点に、メルヴィル独自のゴシズムの変容がみられる。

Notes

- ¹ Eric Savoy 172; Corey Evan Thompson 190-191; Donald A. Ringe 36-57参照。
- ² 『ウィーランド』は、クララ (Clara) が友人に手紙で語る書簡体小説である。狂信者となり不可解な焼死を遂げた父の話から物語が始まり、父親同様宗教心を強める兄セオドア (Theodore) がウィーランド家の友人カーウィン (Carwin) の腹話術により妻と子供を惨殺し、最終的に自殺へと追い込まれる物語である。Punter 191-97参照。
- ³ 19世紀におけるアメリカン・ゴシックについて、2000年に出版されたデイヴィッド・パンター (David Punter) の編集によるアンソロジーの中で、アラン・ロイド・スミスが手際よく概観している参考になる。
- ⁴ ただし、マシーセンがその大著『アメリカン・ルネッサンス：エマソンとホイットマンの時代の芸術と表現』 (*American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*) においてボウをキャンオン作家として見做してはいない。
- ⁵ ここでトンプソンが例に挙げているのは、『ウィーランド』のフィラデルフィア、ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) の短編「スリーピー・ホロウの伝説」 ("The Legend of Sleepy Hollow", 1820) の舞台となっているニューヨーク州タリータウン、ナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) が『緋文字』 (*The Scarlet Letter*, 1850) などで描くマサチューセッツ州 Salem、そして、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) が創出した架空の土地であるヨクナパトーフア郡 (Yoknapatawpha Country) などである。
- ⁶ 例えば、ボウの短篇「告げ口心臓」 ("Tale-Tale Heart", 1843) や、本論で後述する「黒猫」 ("The Black Cat", 1843) などが良い例である。
- ⁷ ボウの眼のゴシックについては、八木 137-51参照。
- ⁸ ルイス・グロス (Louis Gross) の以下の指摘を参照。"American gothicists do not remove their characters to Italy, Spain, France, or the other centers of English Gothic mystery" (Gross 23)。
- ⁹ 「ベニト・セレノ」と「鐘塔」の執筆及び出版過程の詳細については、ハーシェル・パーカー (Hershel Parker) 250, 259参照。実際には「鐘塔」の方が後に書かれている。
- ¹⁰ Karcher 109-59参照。
- ¹¹ メルヴィルの伝記研究者であるローリー・ロバートソン・ローラント (Laurie Robertson-Lorant) に拠れば、ショーが逃亡奴隷を奴隷所有者の元に戻す判決を下したのはジョージア州のプランテーションからの逃亡奴隷シムズだけでない。だが、1851年4月におけるシムズの裁判が、当時『白鯨』を執筆中だったメルヴィルに与えた影響はテキストにも見られるという点において、トンプソンと同様の見解を示している (Robertson-Lorant 128-130, 282-283, 351-354)。
- ¹² この作品は、語り手が犯行に至るまでの心理と犯行過程を獄中から語る内的独白の形式をとる。語り手によって片目を眼窩から抉り取られるプルートをはじめ、彼によって殺されて埋められた壁から発見される妻の「火のような片目 ("solitary eye of fire")」 (Poe 859) など、眼に対するオブセッションは重要なモチーフの一つである。
- ¹³ 例えば、レスリー・ギンズバーク (Lesley Ginsberg) などを参照。
- ¹⁴ マートン・M・シールツ・Jr. (Merton M. Sealts Jr.) によると、メルヴィルが読んだボウの作品は、1860年に彼が読んだ *The Works of the Late Edgar Allan Poe* (1859) の一冊だけである (Sealts 86)。

Works Cited

Chase, Richard. *The American Novel and Its Tradition*. New York: Doubleday, 1957. Print.

Brown, Charles Brockden. *Edgar Huntly; or, Memoirs of a Sleep-Walker*. 1799. Kent: Kent State UP, 1984. Print.

---. *Wieland and Memoirs of Carwin the Biloquist*. 1798. Ed. Jay Fliegelman. New York: Penguin, 1991. Print.

Ginsberg, Lesley. "Slavery and the Gothic Horror of Poe's 'The Black Cat.'" *American Gothic: New Interventions in a National Narrative*. Ed. Robert

- K. Martin and Eric Savoy. Iowa City: U of Iowa P, 1998. 99-128.
- Gross, Louis S. *Redefining the American Gothic: From Wieland to Day of the Dead*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1989. Print.
- Karcher, Carolyn L. *Shadow over the Promised Land: Slavery, Race and Violence in Melville's America*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1980. Print.
- Lloyd-Smith, Allan. "Nineteenth-Century American Gothic." *A Companion to the Gothic*. Ed. David Punter. Oxford: Blackwell, 2000. Print.
- Matthiessen, F. O. *American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*. 1941. New York: Oxford UP, 1964. Print.
- Melville, Herman. "Benito Cereno." 1855. *The Piazza Tales and Other Story Pieces, 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1987. 46-117. Print.
- . *Moby-Dick; or The Whale*. 1851. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1988. Print.
- . "The Bell Tower." 1855. *The Piazza Tales and Other Story Pieces, 1839-1860*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston and Chicago: Northwestern UP and The Newberry Library, 1987. 174-87. Print.
- Morrison, Toni. *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*. Cambridge: Harvard UP, 1992. Print.
- Parker, Hershel. *Herman Melville: A Biography*. Vol. 2. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2002. Print.
- Poe, Edgar Allan. "The Black Cat." 1843. *Tales and Sketches*. Vol. 2. Ed. Thomas Ollive Mabbott. Chicago: U of Illinois P, 1978. 849-60. Print.
- Punter, David. *The Literature of Terror: A History of Gothic Fictions from 1765 to the Present Day*. New York: Longman, 1980. Print.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. New York: Alfred A. Knopf, 1988. Print.
- Ringe, Donald A. *American Gothic: Imagination and Reason in Nineteenth-Century Fiction*. Kentucky: The UP of Kentucky, 1982. Print.
- Robertson-Lorant, Laurie. *Melville: A Biography*. New York: Clarkson Potter, 1996. Print.
- Savoy, Eric. "The Rise of American Gothic." *The Cambridge Companion to Gothic Fiction*. Ed. Jerrold E. Hogle. Cambridge: Cambridge UP, 2002. 167-88. Print.
- Sealts, Merton M., Jr. *Melville's Reading: A Checklist of Books Owned and Borrowed*. Madison: U of Wisconsin P, 1966. Print.
- Thompson, Corey Evan. "The Locale of Melville's Gothicism." *Papers on Language and Literature*. 43. 2 (2007): 190-204. Print.
- 八木、敏雄. 『アメリカン・ゴシックの水脈』東京：研究社、1992. Print.